

笑顔を増やすチームの一員

武田薬品工業株式会社 名古屋支店
佐藤 政史

「どうして〜っ！」ドクターの前で泣き崩れる母親とそれを抱きかかえる父親。

私が忘れることの出来ない、ある病院の小児循環器内科外来での出来事だ。子供を持つ同じ親として、その一瞬の光景で何が起きているのかはすぐに判ったし、その母親の心情も痛い程よく判り、涙が出た。両親が期待と不安の中で見守り続けてきた約1年の日々、そして懸命に生まれてきた子供である。その両親の心痛を思うと、先生も私もしばらく無言で座っているしかなかった。

MRとして大病院の病棟を歩くと同じ様な光景がよく目に飛び込んでくる。体中からチューブが出ている何の罪もない幼子達とその子を見つめる母親。先がどれ位あるのか天井のその上を見据えたまま横たわっているだけの高齢の男性。目も口も機械的に開けられた認知症の患者さんを献身的に介護する家族…。今日も明日も明後日も、その病気の苦しみがいつまで続くのか分からずにいる人が大勢いる。

幼い頃、私は小児喘息だったが、MRであった私の父は病気や薬など色々なことを知っており、とても心強く尊敬できる存在であった。私が製薬会社に就職しMRになったのは父の影響といえる。

MRという仕事は何か。論文を書くために考えるわけではなく、日頃から自問自答することの比較的多い職業だと感じる。それだけ壁に当たることも多く、存在意義を考えさせられる瞬間が多かったと思う。自分は単なる薬の押し売りセールスマンか？医局前の壁の花か？ドクターのご機嫌取りか？患者さんの邪魔か？…こんなマイナスイメージばかり膨らんでしまい、自分の仕事の「使命」を見失いそうになる時もある。

そんな時、使命感を呼び覚まして力を注ぎ込んでくれるのは、私が忘れることのできないあの母親の叫び声だ。悲しみや苦しみに直面している患者さんは今も大勢おり、今、伝える私の情報で少しでも笑顔を取り戻せる患者さん、そしてご家族がいるかも知れない。そう思うと消えかかっていた「私の使命感」はまた蘇る。

その使命感が喜びに代わった瞬間は何度か訪れた。その一事例を紹介する。リウマチの新薬を紹介した某医師であったが、「私の妻は長くりウマチを患っており、関節破壊と痛みが激しく、家事やトイレなど極端に制限された寝たきり状態。もう最後はこれで仕方がない」とのこと。「患者さんの痛みを思うご家族の心の痛み」を目の当たりにして何とかしたいという私の気持ちが高ぶった。「良く効く薬とは聞いているけど、寝たきりに近い状態の患者さんにどこまでお役に立てるのか…」私は半信

半疑ではあったが「どうかその可能性、選択肢をあきらめないで欲しい」と訴えた。副作用情報や関連情報を紹介するために何度も訪問したある日「君を信じて一度頑張ってみるか。この治療法で妻を説得してみるよ」と投薬が開始された。

その翌週である。先生の少し震えた声で「良く効いたよ、びっくりしている。歩けるのが嬉しいのか、急にウロウロし始めたよ。家事はするし仕事に復帰するなど笑いながら言って張り切っていやがる。生活が一変したよ、ほんとにありがとう」とのこと。私の目は涙で溢れ、ただ一言「本当に良かったです」としか言えなかった。「君が泣くことないじゃないか」という先生の目も赤く、とてもやさしかった。

何の取り柄もない私が役に立てるかも知れないのである。「少しでも早く一日でも多く楽にしてあげたい」と願い、東奔西走する医療関係者の方々のチームの一員なのである。私の情報がドクターや薬剤師の方々の選択肢を増やしたり減らしたり出来るのである。そう信じて一つ一つの情報を素早く、的確に一人一人の医療関係者へ届ける。あの子とあの母親を笑顔にさせたい気持ちがある限り、私は毎日これを続けることが出来るし、一生やっていきたいと言える仕事である。何度か薄れかけたが「MRであった父から教えてもらった生き方」はこの様な活動の中、今はしっかりとその形を失うことなく私の中にある。

(MR経験 15 年)